

Title	はじめに(ヨーゼフ・ボイス：ハイパーテキストとしての芸術)
Sub Title	
Author	前田, 富士男(Maeda, Fujio)
Publisher	
Publication year	1999
Jtitle	Booklet Vol.5, (1999.) ,p.3- 4
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000005-04211174

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

美術とは、フォルムや色など空間的に実在する「もの」をメディアとする芸術である。「美」という複雑な概念はそもそもfine artsという原語にない言葉だから避けることにして、造形芸術と言い換えたほうがよいかもしれない。「もの」や「形」をメディアとする造形芸術——考えてみれば、言語や音楽音をメディアとする文学や音楽にくらべて、これほど、素朴かつ無根拠な芸術はほかにない。「もの」はいつ芸術になるのか、また反対に、芸術はいつ「もの」になるのか——造形芸術はつねに、そう問いかけてやまない。諸芸術の入場行進にさいして、美術＝造形芸術がしばしば旗手に選ばれるのは、その「美」ゆえではなく、その「問い」ゆえである。

ヨーゼフ・ボイス(Joseph Beuys)は、かれが望むと望まないとにかかわらず、現代におけるその旗手にほかならない。とはいえ、この旗手を迎えて、観客スタンドに戸惑いのウェーブが生じるのも、故なしとしない。

座り心地のよい観客席に身を置くコノセールたちからすると、「問い」の旗手にデュシャンやウォーホルが現れないのなら、いっそ「美」の旗手としてボルタンスキーやキーファーが歡呼に答えるべきだからである。

ボイス作品のもつ複雑な表情はしかし、観客をしずかに挑発しつづける。「批判精神にみちた芸術作品は、美的＝感性的に受け入れられ、肯定の声をもちて評価された瞬間に、その批判性を喪失する」とかつて述べたのは、ヘルベルト・マルクーゼである。批判的精神を共有してもらうために、作品に肯定的相貌を与えず、感性を逆なでるようにすると、こんどは作品が誰にも共有されない事態を招いてしまう。こうしたマルクーゼの指摘があてはまる芸術は、素朴かつ無根拠な造形芸術作品のほかには考えがたい。だが、ボイスの作品はその稀有な例外である。

ボイスはまた、芸術的行為をつねに社会という光のもとで照らしだすべ

きだと主張した。芸術という感性的コミュニケーションは、思想や政治、宗教、教育にまたがって実践され、追究されなくてはならない。いったい、無根拠の芸術たる造形芸術にとって、これは遂行可能な要請なのか。

この論集は、ヨーゼフ・ボイスの活動と作品をいわばハイパーテキストとして多面的に読み解こうとする試みである。

1996年11月、慶應義塾大学アート・センターは、ボイス没後十年を記念し、東京ドイツ文化センターと共催して三田キャンパス内にて、シンポジウムとビデオ上映「ヨーゼフ・ボイス／感性と社会」を開催した。3日間にわたって、ヨーゼフ・ボイスの活動を記録したビデオ・フィルム12本がギュンター・ミーナス氏の解説をはさんで連続上映され、また最終日にはミーナス氏の基調講演をもとに11名の参加者によるラウンドテーブル・シンポジウムが行われた。その内容は、慶應義塾大学アート・センター発行の『慶應義塾大学アート・センター年報1996／97』と小冊子『ヨーゼフ・ボイス／感性と社会』に記載した。

本論集はこのシンポジウムをきっかけに成立した論文集で、ギュンター・ミーナス氏の論考はシンポジウム基調講演を同氏の許可をえて訳出したものだが、その他の論考は各自の関心から後日あらたに書き下ろされた。報告論集ではないので自由なご寄稿を呼びかけたが、このように多彩で示唆深い論考を収めることができた。ひとえに執筆者の方々のご厚意の賜物と心から感謝申し上げ、にもかかわらず当方の不手際から刊行が遅れたことをお詫びしたい。論文執筆者諸氏、文献・年譜の資料作成にあたられた三本松倫代さん、そして東京ドイツ文化センターはじめ関係者各位に記して謝意を表する次第である。

慶應義塾大学アート・センター 前田富士男